



Title	冷戦・核兵器・核抑止：「水晶球」は割れないか？ 核兵器と危機の安定性をめぐって
Author(s)	山田, 康博
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1995, 5, p. 33-60
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99705">https://hdl.handle.net/11094/99705</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 冷戦・核兵器・核抑止

ー「水晶球」は割れないか？核兵器と危機の安定性をめぐってー

山 田 康 博

### はじめに

核兵器が出現した直後から、それが戦争と平和の問題や国際システムをどのように変化させたのか論議されてきた。<sup>(1)</sup> 核兵器が生まれてから40年以上をへた1986年に、冷戦史家のジョン・ギャデイスが「長い平和」という論文を発表し、それ以来核兵器が冷戦とりわけ米ソ間の戦争の不在に与えた影響をめぐる議論が、さらに活発に展開されることとなった。ギャデイスが、冷戦を大国間の戦争の不在として評価し、核兵器が米ソ関係を含む戦後の国際システムを安定化させる重要な要因のひとつであった、とする見方を強調したからである。<sup>(2)</sup>

ギャデイスの見方を支持するひとりに、ジョセフ・ナイがいる。ナイは、核兵器が「水晶球効果」をもつと指摘する。核兵器の「水晶球効果」とは、核兵器があたかも未来をうつしだす水晶球のように、核戦争がもたらす惨禍を米ソ両国の指導者たちに想起させ、彼らに戦争にならないよう慎重に行動させるはたらきをしてきた、というものである。<sup>(3)</sup> マクジョージ・バンディも、核兵器をめぐる50年の歴史を描いた著書の中で、「核戦争を避けるという必要性が、大きな慎重さを米ソ両政府に課してきた」と認め、核兵器が米ソ関係を安定化する要因であったとした。<sup>(4)</sup>

他方では、米ソ間の戦争の不在に関して核兵器の役割を大きく評価する見方に真っ向から対立する見方もある。ジョン・ミューラーは、過去数世紀間の歴史的過程の結果、大国間の大規模な戦争が時代遅れになったと論じ、核兵器は「長い平和」にとって「本質的に無関係」とであると主張した。<sup>(5)</sup> ミューラーほど極端ではないが、核兵器が米ソ間の戦争の不在に果たした役割がそれほど重要ではない、

とする論者はほかにもいる。そのひとりジョン・ヴァスケスは、米ソ間の戦争の不在において核兵器がはたした役割は小さく、それ以上に重要なのは「米ソ両国の関係が進展するにつれて生まれてきた米ソ間の行動規則の役割である」と論じている。<sup>6)</sup> またロバート・ヨハンセンは、核兵器が国際システムの上に安定をもたらしたとする議論が、しっかりとした歴史的根拠の上に立てられた議論だとはいいがたいと批判する。そして「1914年から1945年にかけての激動をへた後の国際システムの安定性が、核抑止を安全にしたのであり、核兵器が国際システムを安全にしてきたのではなかった。戦争への準備が平和をもたらしたのではなく、平和が軍備拡張を許容可能なものにしてきたのだった」と記している。<sup>7)</sup>

これら両者の中間に立つ見方もある。例えばロバート・ジャーヴィスは、「核革命」の結果出現した米ソ相互の脆弱性状況が米ソ関係の安定化に貢献する一方、核兵器が危機を不安定化させたとし、核兵器が国際システムや米ソの戦略的關係において、安定化要因としてもまた不安定化要因としてもはたらいた、と論じている。<sup>8)</sup> 梅本哲也も、核軍備が米ソ「敵対」の手段として機能した一方で、「核戦争の恐怖は他の要因とも相俟って米ソ『避戦』を持続させた」とみている。<sup>9)</sup>

米ソ両国が互いに相手の本土を攻撃目標とするような戦争の起こりにくい状態は、一般に「戦略的安定」と呼ばれる。梅本哲也は「戦略的安定」を、「危機における安定」、「軍拡競争にかかわる安定」、「抑止にかかわる安定（政治的關係における安定）」の三つの側面に分類している。<sup>10)</sup> これら三つの側面のうち主として「危機における安定」の側面について、核兵器が米ソ間の「戦略的安定」を増大させたのか低下させたのかを検討することが、本稿の目的である。

冷戦期には、米ソ両国が対立した国際危機がいくつもあった。1948-49年のベルリン封鎖、1950年-53年の朝鮮戦争、1958-59年と1961年のベルリン危機、1962年のキューバ・ミサイル危機、1973年の中東危機などである。とくに1962年のキューバ・ミサイル危機は、米ソ核戦争の瀬戸際までいったといわれる。核兵器はこれらの米ソが関係した国際危機が戦争へと拡大させないように危機の安定性を高める役割をはたした、と論ずる識者は多い。その論拠は主として、核戦争のもたらす大きな破壊の可能性が米ソ両国の指導者たちの言動に慎重さをもたらしたとする、核兵器の「水晶球効果」に求められている。ジョン・ギャディスやマクジョー

ジ・バンディは、核兵器の存在がアメリカとソ連の政治指導者たちの行動を、核兵器が存在しなかった場合よりもより慎重にした、と考えているし、<sup>100</sup> 梅本哲也も同様に、「危機における「米ソ」両国指導者の言動は、核兵器が存在しなかった場合に想像されるよりも、概して注意深いものであった」との見解をとっている。<sup>102</sup>

本稿は、核兵器を中心に構築されてきた核戦略態勢や核抑止論に内在する矛盾が、逆に国際危機を不安定化する要因となることを明らかにして、これらの見解に対する反駁を試みる。国際危機が戦争に拡大する方向として、次のような道筋を想定できる。すなわち、(1)軍事的あるいは政治的損失に直面した指導者たちが意図的に戦争へと拡大させる、(2)戦争への発展を不可避だと考える指導者たちが先制攻撃を行う、(3)偶発的におこる事件などの意味を読み違えることから戦争が始まる、(4)コンピューターの誤作動や人間が犯す誤操作によって戦争が始まる、(5)指揮系統の末端にある前線指揮官などによって許可なく攻撃が行われる、(6)第三国やテロリストによる策動に触発されて戦争が始まる、(7)核弾頭や運搬システムにおこる偶発的な事故から戦争が始まる、などの道筋である。<sup>103</sup> これらのうち本稿が対象とするのは、(1)から(5)である。

本稿は次のような構成をとる。まず第一節で、国際危機が深刻化すると先制攻撃への圧力が強まることを論じる。第二節では核兵器が偶発戦争の可能性を高めたと論じ、偶発戦争の引き金となりうる偶発事件の実例を、キューバ・ミサイル危機にみる。第三節では「使用性パラドックス」の問題に触れ、第四節ではこれまでに他の論者が展開してきた議論とは異なった観点から、核兵器が国際危機をつくりだす点を検討する。結論として本稿は、核兵器が危機における安定を低下させる要因であったと論じ、危機が米ソ間の戦略戦争に拡大しなかった理由を最後に簡単に考察する。

ところで、この問題を今取り上げる意義はどこにあるのだろうか。米ソ冷戦が終結し国際秩序が大きく変貌を遂げる中で、冷戦後の世界における核兵器の役割が現在問い直されつつある。1994年9月にアメリカ政府は、核戦略態勢の見直し作業の結果として、今後も約3000発の核弾頭を保持し核抑止力を維持してゆく方針を発表した。<sup>104</sup> また1995年4月には、発効25周年を迎える核拡散防止条約の再

検討会議が開催される。その検討の中では核拡散の問題と関連して、核兵器の冷戦後の世界における役割が論議されることとなるだろう。冷戦時代に核兵器が米ソ関係を安定化させたのかそれとも不安定化させたのかを検討することは、冷戦後の国際社会における核兵器の役割を考える手掛かりの一端を与えてくれるだろう。この問題を取り上げる意義はそこにある。

## 1. 使うか失うか—先制核攻撃への圧力

米ソ両国が対峙する国際危機の緊張の中で両国の指導者たちは、相手側が先制核攻撃をしてくるかもしれないという不安をいだく。しかも逆に、相手に先んじて先制核攻撃 (pre-emptive strike) をかけようとする圧力も、米ソ双方にはたらく。核兵器はこのような不安と圧力を通じて、国際危機を不安定化させる要因となった。

ロバート・ジャーヴィスによれば、米ソの指導者は危機が激化していくと、戦争が不可避で差し迫っていると判断したり、相手側は今すぐにも先制攻撃にうったえるかもしれないと考えやすくなる。<sup>15)</sup> 実際、キューバ・ミサイル危機の時アメリカの国防長官だったロバート・マクナマラ (Robert McNamara) は、危機を回想してこう述べている。「われわれが恐れたのは、ソ連による先制核攻撃です。われわれが5000発の核兵器をもっていたのに対し、彼らは300発の脆弱な核兵器をもっていました。核兵器を使わなければならない、さもなくば失ってしまう、と彼らが感じるかもしれない、とわたしたちは恐れていたのです。」<sup>16)</sup>

マクナマラたちが恐れたように、米ソの指導者たちは緊迫した危機の際に、先制核攻撃への心理的圧力を受ける。米ソ全面核戦争において、たとえわずかであっても「勝ち残る」可能性を探るとすれば、何よりも核先制攻撃をすることが不可欠だとされる。先制攻撃こそが自国の受ける損害をへらしたり、相手より優位に立つ機会をもたすからである。また仮に戦争が不可避であるとすれば、先制攻撃を受けるよりも相手に対してかけるほうが望ましいと考えるのは、いわば当然のことだろう。<sup>17)</sup> しかも、相手側が先制核攻撃をしてくるかもしれない、という不安がある。こうして、相手に先をこされて「勝ち残る」機会を失ってしまう前

に、相手に先んじて先制攻撃をしようとする心理的圧力が、敵対する双方の指導者に強くはたらくことになる。ジャーヴィスは、この先制核攻撃への心理的圧力こそが、相互確証破壊状況のもとですら米ソが核戦争にいたる可能性として最大のものである、と説く。<sup>98</sup>

指導者たちに加わる先制核攻撃への心理的圧力を強める要因として、核兵器体系や核戦略態勢がもつ三つの問題点を指摘できる。第一は、敵の先制攻撃を受けた場合に、核戦力が麻痺してしまう可能性である。実際、マクナマラが指摘したキューバ・ミサイル危機の際のアメリカ側の懸念は、ソ連核戦力の脆弱性がソ連にとって先制攻撃への誘因となるのではないか、ということだった。<sup>99</sup> 1945年から1950年代を通じて、潜水艦搭載の戦略核ミサイル（SLBM）や堅固化された地下サイロに収納されたICBMはまだ存在しておらず、米ソの核戦力はともに脆弱性が高かった。ひとたび核先制攻撃を受けると、一度も使われることがないまま核戦力が破壊されてしまうかもしれなかった。アメリカが圧倒的な戦略核バランス上の優位に立っていたとされる1950年代であっても、アイゼンハワー政権はアメリカの核戦力がソ連の攻撃を受けて崩壊する可能性を危惧しており、<sup>100</sup> この時期にアメリカの核戦略家や政策立案者たちを悩ませていたのが、相手から先制攻撃を受ける不安だったのは当然であった。<sup>101</sup> 戦略核バランスのうえで大きな差をつけられていたソ連は、核戦力の脆弱性について、アメリカよりも強い危惧感をもっていたかもしれない。

1960年代以後になっても、核報復戦力が麻痺してしまう危険が依然として残された。1960年代以降ICBMの地下サイロ収納化やSLBMの配備がすすめられ、核戦力の非脆弱化が精力的に進められたが、核戦力の使用をコントロールする頭脳と神経に相当する指揮・管制・通信・情報（Command, Control, Communication and Intelligence. C<sup>3</sup>Iと略称される）システムは、脆弱なままだった。いわゆる核「首きり」（decapitation）攻撃を受けてC<sup>3</sup>Iシステムが崩壊し、核報復戦力が麻痺してしまう危険性は、核戦力を相手に先んじて使うかさもなくば失うか、という選択を指導者たちに迫るものであり、自らの核戦力を失う前に先制攻撃をかけようとする圧力を強めざるをえない。<sup>102</sup>

第二に、対兵力戦略の採択が、先制核攻撃への大きな誘因となる。核戦争に

「勝ち残る」ためには、相手の核攻撃から受ける損害の限定が不可欠であり、損害限定の手段として最も有効なのは、相手の核戦力自体を攻撃目標とする対兵力攻撃である。ところで対兵力戦略は、相手がすでに核攻撃を開始した後では、損害限定の目的を達成することができない。すでに相手がミサイルを発射した後のからになった核ミサイル収納サイロを破壊しても、損害限定という目的にとっては何の意味もないからである。したがって、敵の核戦力が発動される前にそれを攻撃し破壊することが重要であり、先制攻撃こそがそれを可能にする。<sup>93</sup> 国際危機において対峙する双方がともに対兵力戦略をとっている場合には、使うか失うかという先制核攻撃への圧力は、いっそう強まるだろう。

対兵力戦略の採択の例を、ケネディ政権にみてみよう。ケネディ政権のもとで1962年8月、新たな核戦争計画（Single Integrated Operational Plan. SIOPと略称される）であるSIOP-63が採択された。SIOP-63は、先制核攻撃を前提とした対兵力攻撃オプションを含んでおり、その内容がケネディ大統領に9月14日に伝えられている。またキューバ・ミサイル危機直後の1962年11月には、1969年6月の時点を想定したソ連とその同盟国内にある核攻撃目標一覧が策定されている。それによると、核攻撃目標総数1860のうち都市産業目標はわずか210にすぎず、残りの1650は核ミサイル格納サイロやソ連の指揮中枢などの軍事目標だった。<sup>94</sup> これらに先立つ1962年6月にマクナマラが、ミシガン州アン・ナーバーでの演説の中で「都市回避（city-avoidance）」＝対兵力戦略の採択を表明したように、ケネディ政権は対兵力戦略への傾斜を、隠すことなく公けにしていた。<sup>95</sup>

以上のような先制核攻撃への圧力を強める要因に加えて、第三に、核兵器技術の進歩が第一撃対兵力攻撃能力を大きく向上させ、対兵力戦略を現実の政策として構想しうる程度にまで高めたことも見逃せない。<sup>96</sup> ブルース・ラセットによれば、「危機における抑止の安定性と軍拡競争の相対的安定性との二つの要素は、米ソのいずれもが第一撃能力をもたなかったという事実に基づいているものであった」が、核兵器体系における技術的進歩は、米ソの第一撃能力を向上させ、危機の安定性の基盤を掘り崩すこととなった。<sup>97</sup>

第一撃能力の獲得につながる技術的進歩には二つあった。まず戦略核ミサイルの開発が、核弾頭が攻撃目標に到達するまでの時間を大きく短縮したことである。

相手国近海を回遊する潜水艦から発射されるSLBMは、わずか数分で相手国領土内の攻撃目標に到達できる。相手に探知されにくい「ステルス」爆撃機も、相手に警戒時間をほとんど与えずに先制攻撃をかけうる能力をもつと考えられた。核ミサイルが目標に到達するまでの時間の短さは、核先制攻撃をする側を大きく有利にした。<sup>98</sup>

その上、核弾頭の命中精度が大きく向上した。1970年代になると、MIRV化され命中精度が著しく改善された核ミサイルが登場し、第一撃能力を米ソが獲得するのではないかと懸念が強まった。アメリカは1970年から、MIRV化され高い命中精度をもったICBMミニットマンⅢ型の配備を開始している。一方ソ連は1970年代半ば以降、MIRV化され従来のソ連の戦略核ミサイルに比べて二倍から三倍の命中精度をもつ新型ICBM（SS-17、SS-18、SS-19）と新型SLBM（SS-N-18）をつぎつぎと配備した。<sup>99</sup> 命中精度の向上は、核弾頭の破壊力の大きな増大を意味し、米ソに大きな「硬化目標破壊能力」をあたえることとなった。<sup>100</sup> 「硬化目標破壊能力」の獲得を前提として、ニクソン政権は1974年1月に「目標変更の原則」を発表し、カーター政権は1980年8月に「相殺戦略」を発表する。1970年代から1980年代初めにかけてアメリカ核戦略は、核兵器を実際に使用することを前提とした、限定核戦争戦略を強調するようになったのである。<sup>101</sup>

このように核戦略態勢は、危機において米ソ両国の指導者たちに先制攻撃への圧力を加えた。その上、先制核攻撃がそれ以外の選択肢に比べてより悪くない選択肢だ、と相手側はみなしているのではないかという疑いを、米ソ双方の指導者たちの間に呼び起こすことにもなった。このような状況は最悪の場合、もはや核戦争をするかどうかという選択ではなく、先制攻撃によって核戦争を開始する側になるかどうかという選択しかない、と危機において米ソ両国の指導者たちに思わせることになったかもしれない。<sup>102</sup>

ところで、先制攻撃への圧力を弱める方法のひとつとして、核戦力とC<sup>3</sup>Iシステムのさらなる非脆弱化が考えられる。すなわちそれは、対決する双方が先制攻撃その他いかなる手段によっても相手の核報復力を無力化することが不可能となるように、双方が確実な第二撃核戦力をもつことであり、いわゆる「相互確証破壊」状況の確保にほかならない。しかし、抑止論のひとつの立場からいえば、



相手の攻撃を抑止する真に信頼性のある核抑止力は、抑止が破れた際にも核戦争に確実に「勝ち残る」態勢を要請し、そのカギは損害限定である。双方ともに確実な第二撃核戦力をもつということは、核戦争の際に双方ともに自国の国民を相手核攻撃にさらすことを意味し、それでは核戦争に勝ち残りうる態勢を整えていることにはならない。したがってこの立場に立つならば、そのような核戦力は抑止力として信頼性をもちえない、ということになる。<sup>83</sup>

ここに「危機における安定」をめぐる核抑止戦略の矛盾があることを、見過ごしてはならない。すなわち、一方で危機の安定性にとっては、先制核攻撃をかけようとする誘因を減らすために、米ソ双方の核戦力が非脆弱であることが望ましいとされる。しかし他方で抑止の信頼性にとっては、相手側の核戦力を破壊できるよう相手の（アメリカからみればソ連の、ソ連からみればアメリカの）核戦力が脆弱であることが望ましい、とされるのである。言い換えると、危機の安定性にとっては対兵力攻撃能力の保有は好ましくなく、抑止の信頼性にとってはそれが好ましい、ということである。これは矛盾にはかならない。<sup>84</sup>

## 2. 偶発核戦争の可能性とキューバ・ミサイル危機時の偶発事故・事件

核兵器を中心とした核戦略態勢の発達、偶発的な事件や事故をきっかけにした偶発戦争の可能性を増大させ、危機の安定性を低下させることとなった。キューバ・ミサイル危機は、その実例を提供してくれる。

核兵器とその運搬手段の発達は、核戦力の破壊力を大きく増大させた。水爆は、一発で大都市全体を破壊する威力をもつ。しかもICBMなどの核ミサイルの出現は、相手が攻撃をはじめたという警報を受けてから対応を決める時間を、きわめて短くした。第二次世界大戦までは、相手の攻撃を受けてから反撃に移るまでに数日ないしは数週間の時間的余裕があったが、核兵器の巨大な破壊力と核ミサイルは、そのような余裕を指導者たちから奪い取ってしまった。そのため核兵器体系の発達にともなって米ソ両国は、奇襲攻撃に備えた即応態勢をとるようになり、核時代以前に比べて、偶発事故や事件によって偶発戦争がはじまる可能性は増大した。<sup>85</sup>

国際危機の際には、偶発戦争の可能性はさらに高くなる。危機が緊迫化すると危機の当事国は、勃発するかもしれない戦争に備えたり相手を抑止するために、警戒態勢を強化する。このため平常とは違う活動を余儀なくされることなどから、さまざまな予期せぬ事故や事件が発生しやすくなる。高められた核戦力の即応性と相手が先制核攻撃をするのではないかという疑心は、そうした予期せぬ事故や事件によって偶発核戦争が始まる危険性を高くする。<sup>68</sup> 中でも、相手が核攻撃を開始しそうであるかあるいはすでに開始したという警報があった場合に、それが間違いのない真実であるかどうかを確かめる時間的余裕が乏しいので、誤報であるにもかかわらず核報復力を発動させ、結果的にどちらの側も望まない核戦争を招いてしまう可能性は、その最たる例であろう。

また警戒態勢を強めること自体が相手を刺激し、危機を戦争へと拡大させる引き金となる恐れもある。ポール・ブラッケンによれば、米ソ間には「核戦力の緊密な連携 (the tight coupling of nuclear forces)」があり、C<sup>3</sup>I ネットワークとくに情報収集と警報発令システムを通じて、米ソの核戦力は一種の連動したひとつの巨大なシステムをかたちづくってきた。米ソどちらかが相手に脅威を与えるような軍事行動をとると、相手側の情報収集システムがそれを探知する。探知した側は、相手の軍事行動の意味が不明であれば、先制奇襲攻撃がもたらす最悪事態を避けるために、警報を発令し防衛態勢をとる。そうすると今度は逆に、相手がそれを探知し逆に警戒を強めることとなる。このように米ソは互いに、C<sup>3</sup>I システムを通じて警戒態勢を強めていく関係にあり、危機の際に一方が核戦力の臨戦態勢を強化すると、米ソ間の警戒態勢強化の作用＝反作用を通じて思わぬ結果を生じさせる恐れをもっていた。<sup>69</sup>

国際危機が米ソ間の戦略戦争に拡大するきっかけとなりかねないような偶発事件の実例を、最も核戦争の瀬戸際までいったといわれるキューバ・ミサイル危機の中からいくつかみてみよう。<sup>70</sup> それらは「はじめに」で述べた国際危機が米ソ間の戦争に拡大する道筋のうち、(2)戦争の発展を不可避だと考える指導者たちが先制攻撃を行う、(3)偶発的に起こる事件や日常的に行われている行動の誤解が生む誤報から戦争がはじまる、および(4)コンピューターや人間が犯す誤作動や誤操作によって戦争が始まる、というシナリオが、実は現実化する高い可能性をもっ

ていたことを明らかにするだろう。

第一に、挑発的な警告の発信である。ケネディ大統領がキューバの封鎖を発表した10月22日から2日後の10月24日、戦略空軍は通常の警戒レベル（DEFCON [Defense Condition]）4から警戒レベル2へと移行した。戦略空軍司令官のトーマス・パワー（Thomas Power）は、大統領やエクスコム会議の許可なく、その指令を秘密通信ではなく探知されやすい方法で送信している。彼は、戦略空軍が戦闘準備を整えていることをソ連に警告するために、故意に公然と指令を発したのだった。ところがソ連側がその意味をパワーが意図したように受け止めたかどうかは確かではなく、意図せざるソ連の反応を招くことになったかもしれない。<sup>63</sup>

第二に、モスクワにいたアメリカのスパイが、ソ連の攻撃がさし迫っているという誤った暗号通信を発した。10月22日にソビエト軍情報部に所属し西側のスパイとしてはたらいっていたペンコフスキー（Oleg Penkovsky）大佐が、ソ連KGBに逮捕される直前にCIAに緊急連絡をとろうとして、何らかの理由からソ連の攻撃が差し迫っているとの暗号通信を発信してしまったのだった。アメリカの情報担当官は、その暗号通信を誤りだと判断しCIA本部には伝えなかった。もし実際にソ連の核戦力が臨戦態勢にある時に、同様の情報が同じようなチャンネルで入ってきたならば、事態は全く異なった展開をみせたかもしれない。<sup>64</sup>

第三は、誤報に基づく防空軍迎撃機の緊急発進である。10月25日にミネソタ州のある防空軍基地で、ソ連の破壊工作者とみられる者が基地周辺の防護柵を乗り越えようとしているのが発見され、警備兵が銃を発射した。同時に周辺地域にある基地に、破壊工作者に対する警戒警報が伝えられた。ところがウィスコンシン州の防空軍基地では、破壊工作者に対する警戒を伝える警報ではなく、誤って核戦争の開始を告げる警報がなりだした。警戒レベル3におかれ危機の間は演習はないと伝えられていた同基地のパイロットたちは、核戦争が始まったと信じてただちに核兵器を装備した迎撃戦闘機を滑走路に向けて動かしだした。ミネソタに連絡をとり誤報であることを知った指揮官が、滑走路へ車を走らせ離陸の中止を告げたのは、迎撃戦闘機が離陸する直前のことだった。この事件を引き起こした、基地周辺の防護柵を乗り越えようとしているソ連の破壊工作者と思われたのは、実は一頭の熊だったという。<sup>65</sup>

第四に、危機のさなかにアメリカがICBM発射実験をおこなっている。警戒レベル2（DEFCON2）におかれた戦略空軍は、ICBM発射実験の中心となっていたヴァンデンバーグ空軍基地を管理下におき、同基地にあった9基の実験用ICBMのうち8基に核弾頭を装着した。しかし核弾頭が装備されなかったICBM1基が、危機終盤の10月26日未明に、国防総省から何の指示のないままに発射実験のために打ち上げられてしまった。ソ連がこの発射実験をどのように解釈したのかは明らかでない。当時ソ連は人工衛星による偵察活動を十分行っていなかったもので、このICBMの発射実験に気がついていなかったかもしれない。しかし、ソ連の早期警戒網がこのICBM発射を探知し、それをアメリカによる核攻撃のはじまりだと解釈していたならば、米ソ間に核戦争が始まっていた可能性がある。<sup>43</sup>

最後に、危機大詰め10月27日、キューバ上空で偵察飛行中のU2型機が撃墜され、別のU2型機がソ連のシベリア領空に迷い込んだ。キューバ上空でのU2型機の撃墜はソ連軍によるものだったが、事前にソ連首脳部から撃墜の許可を得ていなかった。ケネディ大統領とエクスコム会議のメンバー数名は、U2型機の撃墜がフルシチョフ首相の指令によるものであり、彼が戦う決意であることを示していると解釈した。<sup>44</sup> 一方シベリア上空では、U2型機がソ連軍ミグ戦闘機の追跡を受け、核弾頭を装備した米軍戦闘機がアラスカから救出に向かった。幸い米ソ両軍が戦闘を交えることはなく、U2型機は無事アラスカに帰還している。スコット・セーガンによれば、ソ連はこのU2型機の侵入飛行を、アメリカが先制核攻撃の直前におこなう攻撃目標確認のための偵察飛行だ、と解釈する恐れがあったという。<sup>45</sup>

幸いなことにこれらの偶発事件から米ソ間に戦略戦争は起こらなかったが、いずれの事件も、偶発核戦争を引き起こす可能性を多分にもっていた。戦争に至らなかったのは、偶発戦争を防止する機能がはたらいたからだというよりも、単なる幸運によるところが大きかったからだといえる。<sup>46</sup> ともあれ、これらの事件が間違いなく示しているのは、米ソの指導者たちがどちらも自国軍の行動を完全に管理していたわけではなく、危機が制御不能におちいる要素を含んでいたことである。

### 3. 「使用性パラドックス」と偶発核戦争

偶発的な事故や事件などから国際危機が戦争に拡大する問題をさらに複雑にするのが、核戦略態勢に内在する「使用性パラドックス (usability paradox)」である。

真に信頼性のある核抑止力は、抑止が破れた際にも核戦争に勝ち残る態勢だとされる。そのような態勢とは、いざという場合に遅滞なく核戦争を戦いうる即応態勢であり、核戦力を平時であっても常に戦闘可能な状態におき、危機の際には警戒・即応態勢をさらに強化することを意味する。しかし、国際危機においていざという場合に備えて即応態勢を強めることは、前節でみたように、偶発核戦争の可能性を高め危機の安定性を低下させる。

逆に、核兵器の即応態勢を強めることから生じる偶発核戦争の可能性を減らそうとして、危機にあっても警戒態勢をとらないのであれば、それは抑止の信頼性を低下させ、相手の攻撃の抑止に失敗する結果となるかもしれない。いざという場合に即応できない核戦力は、攻撃を受けるなどして使用不能に陥るかもしれず、使えない兵力は抑止の信頼性を欠くからである。あるいはまた、許可なき核兵器の使用を防ぐために、大統領などの指揮中枢が核弾頭封鎖装置 (Permissive Action Link, 略称 PAL) の事前解除をしなかったり、核兵器使用の権限を集中管理することは、相手の先制攻撃（とくに核「首きり」攻撃）を受け指揮中枢が崩壊した場合、核戦力全体が機能マヒに陥り報復攻撃ができなくなる危険を犯すことになる。<sup>49</sup>

これが「使用性パラドックス」である。すなわち核戦力は、抑止力として信頼性をもつためには使用できる状態におかれなければならないが、そうすることは偶発核戦争の危険性を高める。しかし、偶発的な核戦争を防ぐために核戦力を使いにくくすることは、抑止の信頼性の低下を招いたり、指揮中枢がマヒする危険性を伴うのである。核戦略態勢の発達が、偶発核戦争の可能性を高め危機の安定性を低下させた上に、核戦略態勢に存在する「使用性パラドックス」は、偶発核戦争と抑止の信頼性の間のジレンマの解消を困難にしたのだった。

#### 4. 危機の原因としての核兵器

前節までに、核兵器が「危機における安定」をそこなう要因となることを論じてきた。次に、主にキューバ・ミサイル危機を例にして、核兵器がそもそも国際危機をつくりだすはたらきに目を向ける。

これまで核兵器が国際危機の原因となるというとき、それは核バランス上優位にある側よりもむしろ劣位にある側が、危険をおかして現状変更を迫ることから国際危機がつくりだされてきた、という意味でとらえられてきた。<sup>43</sup> しかし、核バランス上劣位にある側からの現状変更の試みではなく、むしろ優位にある側の現状維持の試みが、逆にキューバ・ミサイル危機を生み出したのであり、その意味で核兵器が危機の原因となった、といえないだろうか。キューバに配備された核ミサイルそれ自体が危機を引き起こしたのではなく、アルバート・カーネセールが指摘しているように、「危機はキューバにあるミサイルに対してアメリカが示した反応の仕方のためにアメリカによって引き起こされた」のである。<sup>44</sup> つまり、核バランス上優位にある側による現状維持の試みが、危機を生んだのだった。

アメリカがあのように反応したのはなぜだろうか。米ソの間の戦略核バランスの変化を恐れたからだろうか。ソ連によるキューバへの核ミサイル配備が、米ソ間の戦略核バランスを大きく変更するものなのかどうかについては、ケネディ政権の高官たちの間で見解が分かれた。統合参謀本部や当時財務長官だったダグラス・ディロン (C. Douglas Dillon) は、キューバに配備された核ミサイルが戦略核バランスを大きく変えるものだとして認識していた。一方、マクナマラや大統領側近のひとりセオドア・ソレンセン (Theodore C. Sorensen) は、それが戦略核バランスに変化をおこさないと考えた。<sup>45</sup> 10月16日のエクスコ会議で、バンディが「キューバにある中距離核ミサイルがアメリカの立場に与える影響は何か、これがどれほど大きく戦略的均衡を変更することになるのか」とたずねた時、マクナマラは、統合参謀本部が「かなり大きい変化だと言った。わたしの個人的見解は、全然影響はないというものだ」と答えている。<sup>46</sup>

しかしケネディ政権は、ソ連によるキューバへの核ミサイル配備を黙認しなかった。キューバの核ミサイル問題を討議したエクスコ会議の参加者たちは、キュー

バにおかれた核ミサイルが軍事的に重大な意味をもつ、あるいはたとえそれが軍事的に大きな意味をもたないとしても、政治的に無視しえない重要な意味をもっている、と認識したからである。そしてキューバから核ミサイルが撤去されなければならないという合意をただちに形成してしまうのだった。<sup>60</sup> この合意こそが、キューバへの核ミサイル配備をきっかけとしたキューバ・ミサイル危機のはじまりであった。

アメリカの示した反応は、ソ連がアメリカによる核ミサイルの配備に対して示した反応とは対照的である。1950年代後半から1960年代初めにかけて、アメリカは中距離核ミサイルをトルコ、イタリア、そしてイギリスに配備している。<sup>61</sup> これらの配備によってソ連は核ミサイル攻撃の脅威におかれたが、ソ連はアメリカによる中距離核ミサイルの配備を黙認し、「トルコ・ミサイル危機」や「イタリア・ミサイル危機」は生じなかった。

アメリカがソ連によるキューバへの核ミサイルに示した反応は、それ以降のソ連の核軍拡に対するアメリカの対応と比べても際立って厳しかった。キューバ・ミサイル危機から数年後の1960年代後半に、ソ連はICBMや本格的なSLBMを大量に配備し、アメリカをキューバ危機の時よりもずっと大きな核攻撃の脅威のもとにおくことになる。しかしそれらの核兵器の脅威に対して、当時のジョンソン政権やニクソン政権は、激しい反応をすることはなく、したがって危機も生じていない。

キューバに配備されたミサイルが、核ミサイルではなく通常弾頭しか運搬できないミサイルであったならば、ケネディ政権はあのような反応をしたらろうか。あのように激しいアメリカの反応を呼び起こした大きな原因は、キューバに持ち込まれたミサイルが、通常兵器ではなく、軍事的・政治的により重要な意味をもつ核ミサイルだったことである。ソ連のキューバへの核ミサイル配備によって崩れようとしていた、米ソ間の軍事的・政治的そして心理的な戦略バランスを、アメリカが維持しようとした試みこそが、あのように深刻な国際危機を生み出したのだった。<sup>62</sup> まさに核兵器が国際危機をつくりだす役割をはたしたといっていよう。<sup>63</sup>

## おわりに

冷戦期に米ソ間に戦略戦争がなかった上で、核兵器がはたした役割が何であったのかという問題が、1980年代後半以降活発な論議の対象となってきた。本稿はその問題を考察するひとつの試みとして、核兵器が国際危機を安定化させるのか、あるいは不安定化させるのかという問題に焦点をあてた。本稿の議論を簡単に要約すると、次の三点になる。

第一に、相手に先んじて先制核攻撃をかけようとする圧力が、国際危機で対峙する米ソ双方に対してはたらく。核戦争になっても「勝ち残る」ためには、先制核攻撃こそが最良の手段だからである。指導者たちによって国際危機の戦争への拡大が不可避だとみなされることや、相手が先制攻撃をかけてくるのではないかという疑念が、先制攻撃への心理的圧力をさらに強める。米ソの核戦力やC<sup>3</sup>Iネットワークの脆弱性、対兵力戦略の採択と対兵力攻撃能力の向上もまた、先制攻撃への圧力をさらに強める要因となった。

第二に、核戦略態勢の発達、偶発核戦争の可能性を増加させた。核兵器技術の向上の結果、核兵器がもたらす破壊が極めて大きくなるとともに、攻撃の警報を受けた側が対応を決めるために許される時間はきわめて短時間になってしまった。その上先制攻撃への圧力とC<sup>3</sup>Iネットワークを通じての米ソ間における警戒態勢強化の相互作用が加わって、国際危機が誤報や事故その他を通じて意図せざる戦争へと拡大する可能性は、核時代以前よりも増大した。また核戦略には「使用性パラドックス」が存在しており、核抑止の信頼性と偶発核戦争の防止との間には、トレード・オフの関係がある。核兵器は「危機における安定」を低下させる要因となったのである。しかも、たとえ米ソ両国の指導者たちが危機に際して慎重な行動をとったとしても、指導者たちは危機のさなかに自国の行動を完全に管理しておらず、指導者たちの知らないうちに偶発的な事故や事件から戦争がはじまる危険が高いことは、キューバ・ミサイル危機の実例が明らかにしている。

第三に、核兵器がそもそも危機の原因となってきた。キューバ・ミサイル危機は、ソ連によるキューバへの核ミサイル配備に対してアメリカが示した反応によっ



て起こった危機だった。アメリカが核戦争も辞さない厳しい反応を示した大きな理由は、キューバに配備されたのが核兵器だったからである。核兵器は危機の安定化要因になるどころか、危機そのものをうみだす要因であった。以上が本論の要約である。

さて最後に、米ソ間の戦略戦争の不在と核兵器の関係の問題に立ち戻ってみよう。米ソ両国が冷戦期にいくつかの国際危機を経験し、しかも核兵器が危機の不安定要因となったにもかかわらず、米ソ間に大規模戦争や核戦争がおこらなかったことは、いったいどのように説明されるのだろうか。核兵器があたかも未来をうつしだす水晶球のように、核戦争の惨禍を米ソ両国の指導者たちに想像させ慎重な行動を強いた結果、米ソ間の戦争が抑止されてきたといえるのだろうか。あるいは米ソのもつ核抑止力が相手の攻撃を抑止し、危機が米ソ間の戦略戦争へと拡大するのを阻止したのだろうか。<sup>69</sup>

仮に核兵器に「水晶球効果」があるとしても、実際の危機において米ソの指導者たちが恐れたのが、はたして核戦争であるのか、通常兵器による大規模戦争なのか、あるいはまた核・非核を問わず大規模戦争であるのか、証拠にてらして明確にするのはむずかしい。<sup>69</sup> この点に関連して注目されるのが、米ソ間の戦争の不在についてのジョン・ミューラーの議論である。ミューラーが、大国間の大規模戦争が時代遅れになりつつあった近代の歴史的傾向を指摘し、「核兵器が発明されなかったとしても、[第二次世界大戦後の世界で起こった] できごとは全く同じように進展しただろう」と主張しているからである。<sup>70</sup> つまりミューラーの議論は、核戦争の恐怖ではなく、核・非核を問わず大規模戦争の恐れこそが、米ソ間の戦争の不在にとって決定的に重要だった、と示唆しているのである。

さらには、たとえ核兵器が「水晶球効果」をもっているとしても、すでに論じたように、核兵器は先制攻撃への誘因となったり偶発戦争の危険性を高めるので、危機の不安定化要因となることに変わりはない。しかも、核兵器のもつ「水晶球効果」を受けて慎重な言動をとるとされる指導者たちが、危機全体を完全に管理できるわけでもない。<sup>71</sup> そのことはキューバ・ミサイル危機時の偶発事件の例が示していた。まさにジョセフ・ナイが述べるように、「水晶球は事故や誤算によって打ち砕かれてしまうがゆえに、それは単なる部分的な慰めにすぎない」のであ

る。<sup>69</sup> このように核兵器の「水晶球効果」が危機の戦争への拡大を防いだとする見方には、大きな議論の余地があるといえる。

ここで強調しておかなければならないのは、核戦争での「勝ち残り」をめざした核戦略態勢そのものに危機を不安定化させる要因が内在していること、そして偶発核戦争の引き金となるような事故や事件が危機のさなかにいくつもおきていることである。キューバ・ミサイル危機のような米ソが対決する国際危機において、これまでに水晶球が打ち碎かれることがなかったのは、米ソの指導者たちによる危機管理の試みもさることながら、単なる幸運によるところも大きかったといえるからである。どの程度までそれが幸運によっていたのかを判断するには、旧ソ連側の事情が明らかにならなければならない。それが今後の冷戦史研究にとっての重要な課題であることは、多くが認める通りである。

#### 註

- (1) 最も早いものとして、Bernard Brodie (ed.), *The Absolute Weapon: Atomic Power and World Order* (New York: Harcourt, Brace and Company, 1946) がある。
- (2) John L. Gaddis, "The Long Peace: Elements of Stability in the Postwar International System," *International Security*, Spring 1986 (Vol. 10, No. 4), reprinted in *Idem, The Long Peace: Inquiries into the History of the Cold War* (New York: Oxford University Press, 1987), pp. 215-245 (以下ではこの論文を*The Long Peace*と略記する) ; *Idem, The United States and the End of the Cold War: Implications, Reconsiderations, Provocations* (New York: Oxford University Press, 1992), pp. 105-118. 同様の見方に、Michael Mandelbaum, *The Nuclear Revolution: International Politics before and after Hiroshima* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), pp. 8-9.
- (3) ジョセフ・ナイ J r. 『核戦略と倫理』土山實男訳、同文館、1988年、92-93 ページ。James G. Blight and David A. Welch, *On the Brink: Americans and Soviets Reexamine the Cuban Missile Crisis*, Second Edition (New York: The Noonday Press, 1990), p. 95. ほかに、The Harvard Nuclear Study

- Group, *Living with Nuclear Weapons* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1983), pp. 43-44 (邦訳、ハーバード核研究グループ『核兵器との共存—いま何ができるか』久我豊雄訳、永井陽之助監修、TBSブリタニカ、1984年、87-89 ページ) が、「水晶球効果」に言及している。
- (4) McGeorge Bundy, *Danger and Survival: Choices about the Bomb in the First Fifty Years* (New York: Random House, 1988), p. 592.
- (5) John Mueller, "The Essential Irrelevance of Nuclear Weapons: Stability in the Postwar World," reprinted in Sean M. Lynn-Jones, Steven E. Miller and Stephen Van Evera (eds.), *Nuclear Diplomacy and Crisis Management* (Cambridge, MA: The MIT Press, 1990), pp. 3-27; John Mueller, *Retreat from Doomsday: The Obsolescence of Major War* (New York: Basic Books, 1989). ミュラーの議論への反論は、Robert Jervis, "The Political Effects of Nuclear Weapons: A Comment," reprinted in Lynn-Jones, et. al. (eds.), *Nuclear Diplomacy and Crisis Management*, pp. 28-38; Carl Kaysen, "Is War Obsolete?" reprinted in Sean M. Lynn-Jones (ed.), *The Cold War and After: Prospect for Peace* (Cambridge, MA: The MIT Press, 1991), pp. 81-103; Gaddis, *The United States and the End of the Cold War*, pp. 105-118.
- (6) John A. Vasquez, "The Deterrence Myth: Nuclear Weapons and the Preventions of Nuclear War," in Charles W. Kegley, Jr. (ed.), *The Long Postwar Peace: Contending Explanations and Projections* (New York: HarperCollins, 1991), pp. 205-223. Quotes are in p. 207.
- (7) Robert C. Johansen, "Do Preparatins for War Increase or Decrease International Security?" in *ibid.*, pp. 224-229. Quotes are in pp. 228-229.
- (8) Robert Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution: Statecraft and the Prospect of Armageddon* (Ithaca: Cornell University Press, 1989); *Idem*, "The Political Effects of Nuclear Weapons," pp. 28-38.
- (9) 梅本哲也「冷戦と核兵器」日本国際政治学会編『冷戦とその後』（『国際政治』第100号）日本国際政治学会、1992年、65ページ。

- (10) 梅本哲也「米国核戦略の展開と『戦略的安定』」佐藤誠三郎編『東西関係の戦略論的分析』日本国際問題研究所、1990年、11-13 ページ。
- (11) Gaddis, *The Long Peace*, pp. 229-231; *Idem*, "Great Illusions, the Long Peace, and the Future of International System," in Kegley, Jr. (ed.), *op. cit.*, pp. 27-29; Gaddis, *The United States and the End of the Cold War*, pp. 105-118 ; Bundy, *op. cit.*, pp. 586-593.
- (12) 梅本「冷戦と核兵器」57ページ。なおマーク・トラクテンバーグは、キューバ危機においてアメリカ政府の高官たちが、ソ連に影響力を及ぼそうとして核戦争の危険を意図的に利用したと論じ、核兵器が指導者の慎重さを高めたとはいえないと示唆している。Marc Trachtenberg, *History and Strategy* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1991), pp. 238-241.
- (13) Graham T. Allison, Albert Carnesale, and Joseph S. Nye, Jr., "Introduction," in Allison, Carnesale, and Nye, Jr. (eds.), *Hawks, Doves, & Owls: An Agenda for Avoiding Nuclear War* (New York: W. W. Norton, 1985), pp. 10-17; The Harvard Nuclear Study Group, *op. cit.*, pp. 47-68 (『前掲訳書』91-122ページ) 。ブルース・M・ラセット『安全保障のジレンマ核抑止・軍拡競争・軍備管理をめぐって』鴨武彦訳、有斐閣、1984年、178 ページ。
- (14) *Defense Department Briefing*, September 22, 1994.
- (15) Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution*, pp. 136-137, 153-164.
- (16) Quoted in Blight and Welch, *On the Brink*, p. 69. マクナマラは、キューバ・ミサイル危機の後ソ連がミサイル格納サイロの堅固化を始めたときには、とても安心した、と述懐している。*Ibid.*, p. 70.
- (17) Lawrence Freedman, *The Evolution of Nuclear Strategy*, Second Edition (London: The Macmillan Press, 1989), pp. 125-127; The Harvard Nuclear Study Group, *op. cit.*, pp. 53-55 (『前掲訳書』100-104 ページ) 。山田浩『核抑止戦略の歴史と理論』法律文化社、1979年、285 ページ。
- (18) Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution*, pp. 24, 137.
- (19) Blight and Welch, *On the Brink*, p. 69.
- (20) Richard K. Betts, *Nuclear Blackmail and Nuclear Balance* (Washington,

- D. C.: The Brookings Institution, 1987), pp. 144-179. 拙論「アメリカの脆弱性とアイゼンハワー政権 1953-1954年」『大阪外国語大学 アジア学論叢』第4号 (1994年1月) 309-329 ページ。
- ②1) Freedman, *op. cit.*, pp. 123-171.
- ②2) Paul Bracken, *The Command and Control of Nuclear Forces* (New Haven, CT: Yale University Press, 1983), pp. 232-237; Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution*, pp. 143-144. 山田浩『限定核戦争論とSDI問題—その歴史的系譜と理論構造』(IPSHU研究報告シリーズ14) 広島大学平和科学研究中心、1986年12月、75-77 ページ。
- ②3) Freedman, *op. cit.*, p. 124; Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution*, pp. 164-166.
- ②4) Desmond Ball, "The Development of the SIOP, 1960-1983," in Desmond Ball and Jeffrey Richelson (eds.), *Strategic Nuclear Targeting* (Ithaca: Cornell University Press, 1986), pp. 62-67; Scott D. Sagan, "SIOP-62: The Nuclear War Plan Briefing to President Kennedy," *International Security*, Summer 1987 (Vol. 12, No. 1), pp. 38-39; *Idem*, *Moving Targets: Nuclear Strategy and National Security* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1989), pp. 28-32. なおソ連の目標設定については、William T. Lee, "Soviet Nuclear Targeting Strategy," in Ball and Richelson (eds.), *op. cit.*, pp. 84-108.
- ②5) Freedman, *op. cit.*, p. 235; Sagan, *Moving Targets*, p. 30. 山田『核抑止戦略の歴史と理論』136-137 ページ。
- ②6) 鴨武彦『国際安全保障の構想』岩波書店、1990年、272ページ。Paul Bracken, "Accidental Nuclear War," in Allison, Carnesale, & Nye, Jr. (eds.), *op. cit.*, p. 47.
- ②7) ラセット『前掲訳書』31ページ。
- ②8) Bracken, "Accidental Nuclear War," p. 47.
- ②9) SIPRI編『世界の軍事力'79-80』(『世界週報』1979年11月22日臨時増刊号)、224-225 ページ。Robert P. Berman and John C. Baker, *Soviet Strategic Forces:*

- Requirements and Responses* (Washington: The Brookings Institution, 1982), pp. 38-108; David Holloway, *The Soviet Union and the Arms Race*, Second Edition, (New Haven, CT: Yale University Press, 1984), pp. 39-64.
- ソ連戦略核ミサイルの命中精度については、SIPRI編『世界の軍勢力'80-81』（『世界週報』1980年10月20日臨時増刊号）、26-27 ページ。
- ③0 弾頭が堅固な目標を破壊する能力を弾頭の破壊指数と呼び、それは弾頭の爆発力の $2/3$ 乗に比例し、命中精度の2乗に反比例する。つまり、弾頭の命中精度が2倍になれば目標破壊力が8倍強化されたことになる。R・C・オールドリッジ『核先制攻撃症候群』服部学訳、岩波新書、1978年、51-52 ページ。
- ③1 山田浩「戦略論議と限定核戦争論—1960年代末以降のアメリカの核戦略構想をめぐって」『広島平和科学』5（1982年）、22-27 ページ。「相殺戦略」については、Louis René Beres, *Mimicking Sisyphus: America's Countervailing Nuclear Strategy* (Lexington, MA: D.C. Heath and Company, 1983); Walter Slocombe, "The Countervailing Strategy," reprinted in Steven E. Miller (ed.), *Strategy and Nuclear Deterrence* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1984), pp. 245-254; Sagan, *Moving Targets*, pp. 49-50.
- ③2 Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution*, p. 137. ラセット『前掲訳書』158-159 ページ。
- ③3 リチャード・B・フォスター『比較戦略論』三好修監訳、学陽書房、1985年、59-141 ページ。Freedman, *op. cit.*, pp. 372-375. 山田『核抑止戦略の歴史と理論』284-286ページ。梅本「米国核戦略の展開と『戦略的安定』」23-24ページ。
- ③4 Robert Jervis, "Arms Control, Stability, and Causes of War," *Political Science Quarterly*, Vol. 108, No. 2 (Summer 1993), pp. 243-244.
- ③5 Scott D. Sagan, *The Limits of Safety: Organizations, Accidents, and Nuclear Weapons* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1993), pp. 263-264. 本書は、平時と危機時をとわず実際に起こった核兵器にかかわる事故や偶発事件と、それらが偶発核戦争へと導く可能性について、最も包括的にあつまっている。
- ③6 Thomas C. Schelling, "Confidence in Crisis," *International Security*,

Spring 1984 (Vol. 8, No. 4), pp. 56-57, 65; Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution*, pp. 143-145. 人間が犯す誤りから起こる偶発核戦争の危険性を論じたものに、ジェームズ・トンプソン編著『核戦争の心理学』黒沢満訳、西村書店、1988年、70-134 ページがある。

- ⑦ Bracken, *The Command and Control of Nuclear Forces*, pp. 59-65; *Idem*, "Accidental Nuclear War," pp. 46-47; Sagan, *Moving Targets*, p. 176.

- ⑧ これらの実例の多くは、スコット・セーガンによって明らかにされた。Scott D. Sagan, "Nuclear Alerts and Crisis Management," reprinted in Lynn-Jones, et. al. (eds.), *Nuclear Diplomacy and Crisis Management*, pp. 166-182; *Idem*, *The Limits of Safety*, pp. 53-155; *Idem*, *Moving Targets*, pp. 145-148. なお、キューバ・ミサイル危機に関する研究の動向については、Robert A. Divine, "Alive and Well: The Continuing Cuban Missile Crisis Controversy," *Diplomatic History*, Fall 1994 (Vol. 18, No. 4), pp. 551-560. 阿南東也「キューバ・ミサイル危機研究の新展開」日本国際政治学会編『ラテンアメリカー1980年代の国際関係と政治』（『国際政治』第98号）日本国際政治学会、1991年10月、129-144ページ。近年刊行されたキューバ・ミサイル危機の研究には、Richard Ned Lebow and Janice Gross Stein, *We All Lost the Cold War* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1994), pp. 17-145, 289-368; Sagan, *The Limits of Safety*, pp. 53-155; Robert Smith Thompson, *The Missiles of October: The Declassified Story of John F. Kennedy and the Cuban Missile Crisis* (New York: Simon and Schuster, 1992); James A. Nathan (ed.), *The Cuban Missile Crisis Revisited* (New York: St. Martin's Press, 1992); Dino A. Brugioni, *Eyeball to Eyeball: The Inside Story of the Cuban Missile Crisis* (New York: Random House, 1991); Michael R. Beschloss, *The Crisis Years: Kennedy and Khrushchev, 1960-1963* (New York: HarperCollins, 1991), pp. 394-575 (邦訳、マイケル・ベシュロス『危機の年ーケネディとフルシチョフの闘い』筑紫哲也訳、飛鳥新社、1992年、下巻10-308ページ)、NHK取材班・阿南東也『十月の悪夢ー1962年キューバ危機戦慄の記録』NHK出版、1992年。花井等・木村卓司『アメリカの国家安全保障政策ー決定プロセスの政

治学』原書房、1993年、291-329 ページ、などがある。またLaurence Chang and Peter Kornbluh (eds.), *The Cuban Missile Crisis, 1962: A National Security Archive Documents Reader* (New York: The New Press, 1992)は、有益な資料と詳細な文献目録を含み便利である。

- (39) *Ibid.*, pp. 155, 190-193; Sagan, *The Limits of Safety*, pp. 63-73; *Idem*, “Nuclear Alerts and Crisis Management,” pp. 160-162; Betts, *op. cit.*, p. 118; Blight and Welch, *On the Brink*, p. 75. 1962年10月22日に、アメリカ軍全軍の警戒態勢が強化され、警戒レベル3 (DEFCON3) へと移された。通常アメリカ軍は、警戒レベル5 (DEFCON5) におかれ、戦略空軍だけは通常でも警戒レベル4 (DEFCON4) におかれている。最も高い警戒状態が警戒レベル1 (DEFCON1) で、それは戦闘配備につきいつでも交戦できる状態である。Sagan, *The Limits of Safety*, pp. 64-65; *Idem*, “Nuclear Alerts and Crisis Management,” pp. 160-162. ピーター・プリングル、ウィリアム・アーキン『S I O P - アメリカの核戦争秘密シナリオ』山下史訳、朝日新聞社、1984年、20ページ。ケネディ政権の指導者たちは、核戦力が警戒態勢を強化することが思わぬ結果を生む可能性に、全く無関心だった。当時国家安全保障担当の大統領補佐官だったマクジョージ・バンディ (McGeorge Bundy) は、「核戦力が警戒態勢に入ることに関する考慮が、われわれに何らかの影響を与えたことは一度もない。それはわれわれの危機感には入っていなかった」と回顧している。Quoted in Blight and Welch, *On the Brink*, p. 70.

- (40) Sagan, *The Limits of Safety*, pp. 146-150; *Idem*, *Moving Targets*, pp. 146-147; Raymond L. Garthoff, *Reflections on the Cuban Missile Crisis* (Washington, D. C.: The Brookings Institution, 1987), pp. 39-41; Blight and Welch, *On the Brink*, pp. 208-209.

- (41) Sagan, *The Limits of Safety*, pp. 3, 99-100.

- (42) *Ibid.*, pp. 78-80; *Idem*, *Moving Targets*, p. 146.

- (43) Bruce J. Allyn, James G. Blight, and David A. Welch, “Essence of Revision: Moscow, Havana, and the Cuban Missile Crisis,” *International Security*, Winter 1989/1990 (Vol. 14, No. 3), pp. 159-163; Lebow and Stein,



- op. cit.*, pp. 303-304; Beschloss, *op. cit.*, pp. 530-532 (『前掲訳書』下巻230ページ).
- (44) Sagan, *The Limits of Safety*, pp. 135-146; *Idem*, "Nuclear Alerts and Crisis Management," pp. 178-181; *Idem*, *Moving Targets*, p. 148; Lebow and Stein, *op. cit.*, p. 342; Blight and Welch, *On the Brink*, pp. 69, 72, 76. なおベシュロス、U2型機の侵入飛行について、攻撃開始直前の偵察飛行だとソ連がみなすような侵入場所ではなかった、と述べている。Beschloss, *op. cit.*, p. 530 (『前掲訳書』下巻229ページ).
- (45) フィリップ・ブレナー「キューバ危機の新たな教訓」NHK取材班・阿南東也『前掲訳書』228-230ページ。Sagan, *The Limits of Safety*, pp. 154-155.
- (46) Sagan, *Moving Targets*, pp. 4-5, 176-177.ラセット『前掲訳書』218ページ。
- (47) Gaddis, *The United States and the End of the Cold War*, p. 111; Lebow and Stein, *op. cit.*, pp. 351-355.
- (48) Quoted in Blight and Welch, *On the Brink*, p. 104.
- (49) *Ibid.*, pp. 25, 120.
- (50) "White House Tapes and Minutes of the Cuban Missile Crisis," reprinted in Lynn-Jones, et. al. (eds.), *Nuclear Diplomacy and Crisis Management*, p. 303; Chang and Kornbluh, *op. cit.*, pp. 102-103.
- (51) Blight and Welch, *On the Brink*, pp. 120-121; Bundy, *op. cit.*, pp. 397-398. 阿南「キューバ・ミサイル危機研究の新展開」132ページ。
- (52) 『世界週報』1958年1月11日号、74ページ。Berman and Baker, *op. cit.*, p. 134; Blight and Welch, *On the Brink*, p. 367 n11.
- (53) キューバ問題をめぐってケネディ政権がおかれていた国内政治上の要因も重要である。Lebow and Stein, *op. cit.*, pp. 95-98; Bundy, *op. cit.*, pp. 392-395; Thompson, *op. cit.*, pp. 161-178; Beschloss, *op. cit.*, p. 438 (『前掲訳書』下巻80ページ)。ただしバンディは、彼の著書の中ではケネディ大統領のとった対応における国内政治要因の重要性を指摘しているが、他の場所では国内政治要因が影響したことを否定している。Bundy, *op. cit.*, pp. 392-395; Blight and Welch, *On the Brink*, p. 73.

- 54) 冷戦期における米ソ間の国際危機とは異なるが、最近の北朝鮮による核兵器開発疑惑をめぐる国際危機も、核兵器が国際危機をうみだすはたらきをした一例であろう。1994年6月に北朝鮮が国際原子力機関からの脱退を表明し、アメリカと北朝鮮の関係が非常に緊迫した。その頃アメリカ政府が、北朝鮮に核爆弾数発分のプルトニウムを保有されるよりも戦争の危険を冒す準備をしていたことを、1995年1月にペリー国防長官が明らかにした。冷戦後も核兵器が国際危機の原因となる例である。『北海道新聞』1995年1月6日夕刊。
- 55) 本来核抑止がきいたのかどうかは証明不能であり、抑止がきかなかったことのみが証明されうる問題である。土山實男「抑止失敗の外交政策理論」日本国際政治学会編『転換期の核抑止と軍備管理』（『国際政治』90号）、日本国際政治学会、1989年3月、35ページ。
- 56) Lebow and Stein, *op. cit.*, pp. 356-357.
- 57) Mueller, *Retreat from Doomsday*, pp. 4, 9-13, 82-84. *Idem*, "The Essential Irrelevance of Nuclear Weapons," pp. 3-27 も参照した。註(5)にあげた文献も参照のこと。なお筆者は、ミュラーの議論に賛成しない。「危機における安定」の側面に限ってみても、核兵器が米ソの「戦略的安定」をそこなう要因となったのであり、核兵器がなければ冷戦史は別の歩みをたどっただろうからである。
- 58) マクナマラは後年キューバ・ミサイル危機をふりかえって、危機管理が不可能であると述べている。マクナマラによれば、「危機を『管理』するというのは、ことばの誤りである。われわれは危機を『管理』しない。なぜならわれわれは危機を『管理』できないからだ」（強調は原文）Quoted in Blight and Welch, *On the Brink*, p. 100.
- 59) ナイ『前掲訳書』93ページ。

〔付記〕 本稿は1994年度（平成6年度）科学研究費補助金奨励研究（A）06851046の成果の一部である。

**The Cold War, Nuclear Weapons, and Nuclear Deterrence:  
Nuclear Weapons and Crisis Stability:  
Does the Nuclear “Crystal Ball” not Break?**

YAMADA Yasuhiro

Many scholars have been involved in the discussion on the elements of stability in the postwar international system since 1986 when John Lewis Gaddis proclaimed the thesis of “the Long Peace.” The most controversial issue has been the role of nuclear weapons in the absence of a major war between the United States and the Soviet Union. This paper presents opposing arguments against the assertion that nuclear weapons were one of the major elements of the stability between the two nations. Focusing on the question of “crisis stability,” I will demonstrate that nuclear weapons were in fact a destabilizing factor in international crises.

First, pressures to strike first increase in a tense crisis, undermining crisis stability. In order to “prevail” in a nuclear war, a state has to limit damages from enemy’s nuclear attacks within an acceptable level. The best way to limit damages from a nuclear exchange is to strike enemy’s nuclear forces before the adversary launch a nuclear attack. In addition, the fear of being attacked first, the vulnerability of nuclear weapons and C<sup>3</sup>I systems, the doctrine of counterforce, and the development of highly accurate nuclear missiles are all likely to increase pressures to strike first.

Second, the development of nuclear forces and the C<sup>3</sup>I systems has increased the likelihood of an accidental nuclear war in a crisis. Crisis-induced accidents in the nuclear age can trigger an unintended war more likely than they might have done in the pre-nuclear age. Decision-makers have to decide how to respond to nuclear alarms within minutes. The

no-time-to-waste characteristics brought by the nuclear weapons systems make an accidental nuclear war through accidents such as false alarms more likely.

Moreover, the "usability paradox" of nuclear deterrence makes it difficult to reduce the likelihood of an accidental nuclear war. Credible nuclear deterrence requires nuclear forces with high readiness. However, while high readiness of nuclear forces increase the likelihood of an accidental nuclear war, measures to prevent an accidental nuclear war decrease the degree of readiness to respond quickly to alerts, and might lead a state to "lose" a nuclear war. Nuclear weapons have to be usable, but not too usable.

Finally, this paper argues that nuclear weapons are a major source of international crises. What caused the Cuban Missile Crisis was not the Soviet missiles in Cuba, but the U.S. reactions to them. If the Soviet missiles had not been nuclear missiles, then the United States might not have reacted in the way it did. Thus, nuclear weapons themselves create a crisis.

Then, what has prevented international crises escalating to a war between the superpowers? Has the "crystal ball effect" of nuclear weapons prevented the major war? It is difficult to see whether it was the fear of nuclear war or the fear of a major war that caused cautions in the minds of decision-makers. Even with the "crystal ball effect" of nuclear weapons, still, nuclear weapons enhance pressures to strike first, increase the likelihood of accidental wars, therefore, destabilize a crisis. No matter how much the "crystal ball effect" of nuclear weapons bring cautions to leaders of the two nations, accidents over which the leaders do not have control can happen and might lead to a nuclear war that nobody wants. It seems very likely that a good luck is one of the major reasons the "crystal ball" has not broken yet. To determine to what extent the absence

of major war between the Soviet Union and the United State depended on a good luck would require further study on how the Soviet Union perceived the danger of a nuclear war and acted in crises.